

2021年5月16日(日)／説教者：國分美生

説教：「神は名前を呼ばれた」

聖書：創世記1:1～13

闇に覆われ、秩序も何もない、カオスの状態。そこから、神は名前を付け、混沌の中からよびだすことで、「そのもの」たちを存在させ、ご自分と関係するこの世界を創り出しました。被造物は神の招きに応答するものとしてつくれ、そこに神と被造物との相互的な関係があります。神が招き、名前を呼び、はっきりと意図的にこの世界を存在させたことを嘔み締めますと、私たちは自分自身や他者の命や存在の重さを改めて認識するに至ります。

名前は存在の証しです。

日本ではかつて、1900年に制定された法律に基づき「私宅監置」という制度がありました。精神障がい者を社会から隔離し、社会を安心・安全で、平和にしよう考えた制度です。隔離された人の中には、精神障害ではなく、目が見えないという理由からの人もあったようですし、当時はあまり理解が進んでいなかった知的ハンディキャップをもつ人、発達障害と言われる人たちも含まれていたかもしれません。闇に葬られてきた歴史は、その後いまだに公的な調査や検証が行われず、犠牲を強いられた人々の尊厳が回復されずにいます。1950年に日本では禁止になったこの制度が沖縄ではその後も続いたのは、サンフランシスコ条約によって沖縄が日本から切り離され、アメリカの支配のもとにあったからです。隔離の犠牲者たちは、家族や友達や社会から切り離され、他者との関係を突然、強制的に断ち切られました。まるで自分の存在がなくなってしまったように感じた、というような証言もあります。人は、名前を呼ばれ、他者との関係を築くことで、自分が何者であるか認識します。名前を呼ばれることは、存在の確かさを証明してくれるものなのです。

バビロン捕囚の中にあつたイスラエルは、バビロニアの神がイスラエルの神に勝ち、世界を支配するという考え方に対して、この聖書テキストをもって反論しましたイスラエルの神は今なお神であり、そのお造りになったものに目を注ぎ、世界を秩序立て、平和をもたらされるお方なのだと。

その神のイメージは新約聖書にも継承されていることが、パウロの手紙(ローマ 4:9)からも見て取れます。そして私たちは福音書の中で、イエスがその時代の社会の外に押し出され、存在を消された人々と交わる様子を見ます。自分自身が神から名前を呼び出され、命を与えられた者だと気づいたとき、同じように命を与えられた存在である他者との関係を大切にしたいへと促されていきます。(國分美生)